# 生活者科学選修へようこそ

秋田大学教育文化学部の地域科学課程は、入学試験は課程単位で行ない、一年次生のうちは課程単位で学習しますが、二年次になると課程内の三選修（コース）に分かれてより専門的に学習し、四年次には学習の集大成としての卒業研究に取り組みます。

以下の解説は、高校生の皆さんに、生活者科学選修について説明し、進学への手引きとなることを目的とするものです。

## 1．生活者科学選修とは

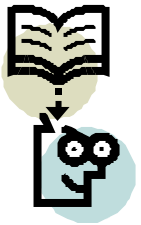
本選修は「人間研究」という学部レベルでの教育研究目的、「地域視点」という課程レベルでの目的のもとに、「地域生活」における私的な領域における諸問題を教育・研究の対象とします。

その問題として次のような例を挙げてみましょう。

- ○ これから 5 年間乗ることになる車のタイプは何がよいだろう？
- ○ 子供の遊び場は多いのに、そこで遊ぶ子どもが減っているのはなぜだろう？
- ○ 家の祖母が催眠商法に引っかかってしまった。他にどんな悪徳商法があるだろう？
- ○ 冬暖かく、夏涼しく秋田での一年間を過ごすにはどうしたらよいだろう？
- ○ 着飽きた衣類がたまってしまった。なぜだろう？どうしたらよいだろう？
- ○ そもそも牛肉は健康によいのか？それとも悪いのか？

こうした問題に共通しているのは、それらは「人」が遭遇している「現実的な解決をせまられている」問題であるということです。そして解決の「方法」が求められています。諸君は人が生きていることを「人生」というなら、人生には星の数だけの哲学問題があることを理解できるでしょうし、その解決には永遠の時間がかかるかもしれません。しかしここでは、人生を「活きる」ことを考えることにし、これを「生活」と呼びましょう。人生と生活の相違については先人の書物を是非とも読んで理解して欲しいところですが、ヒントとして、人生は星空を見つめながら永遠に語り考えることができるが、生活は食べて寝なければ明日がないということを挙げておきます。また先に挙げた例においても、「哲学的解決理念」と「現実的解決方策」がそれぞれあります。カッコいい生き方と堅実な生き方と言い換えてもいいかもしれません。考えてみて下さい。

次に「生活の仕組み」を考えてみましょう。「人は一人で生きられるか？」というのはロマンあふれる哲学的な課題になり得ますが、「生活は相手がある」というのが泥臭い現実です。つまり、人は生活の場を確保し、他人や物と付き合いながら生きざるを得ないのです。そして、その構造を図示したのが次ページの図１です。即ち、人と物と社会・環境を結んだ三角形を作り、それに時間軸に相当する奥行きを与えた空間を作ります。ここで作られる時空間を「生活」といい、この空間を個人的な生活圏に限定すると、そこで生きる人を生活者と呼びます。生活者科学選修ではここで起きる諸現象を研究対象とします。そして、生活者科学選修の教育研究目的は、この空間の各部について個別的・具体的に明らかにし、理解する（させる）ことにあります。



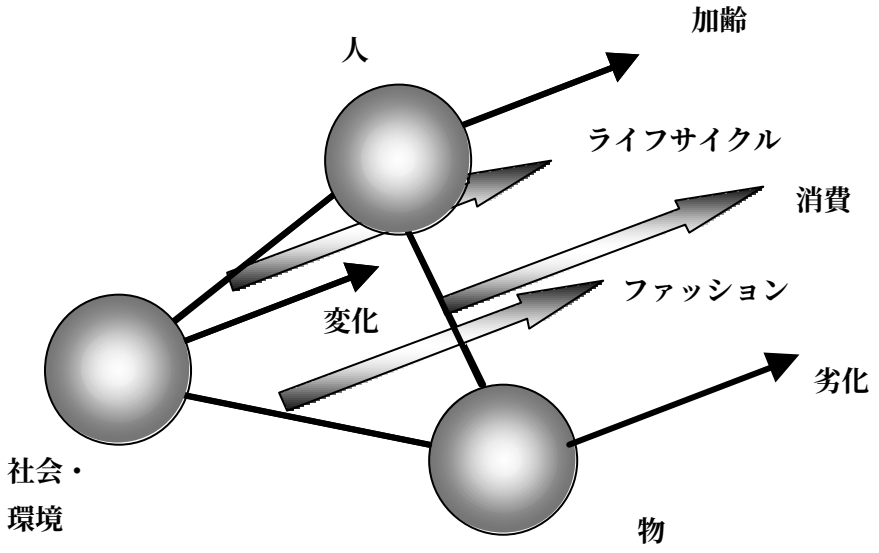



図１．生活の構造

## ２．生活者科学選修で養成したい人材

さて、先述のように生活者科学を定義しましたが、では、この選修ではどんな人材を養成しようとしているのでしょうか。

それは一言でいえば、「生活者理解に立って仕事のできる人材」の養成ということになります。即ち、生活のプロを養成しようというのではありません。どのような仕事に就こうとも、生活者視点を持った人材たれ、ということです。具体例を挙げましょう。

○　企業で営業職に就く　→
　販売しようとしているものが購入者の生活で活かされている場面が想像できる。また同物の性能を評価できる。

○　企業で製造職に就く　→
　この製品が生活に役にたつかどうかを考えることができる。

○　行政職で政策立案にたずさわる　→
　その政策を住民の視点から評価できる。

○　生活相談窓口での対応者となる　→
　相談者の生活問題が理解できる。

○　社会グループで指導する　→
　指導を受ける側の視点に立つことができる。

等があげられます。

では、何か専門的な知識は身につかないのでしょうか。素直に認めます。専門的職業人を養成する専門（プロ養成）学部には敵いません。しかし、実際の専門家養成はいかに不況下といえども、企業入社後や大学院において行われている現実があります。多くの企業の人事担当者は言います。「専門バカはいらない。なぜなら入社後我々が鍛えるから。それよりも、幅広くユニークな視点を持った素直な人材が欲しい」と。大学院における研究においても、問題点の発見能力と解決能力が最大の課題であり、ある意味百科辞典的な幅広い基礎知識が土壇場で必要です。

私たちが一番恐れていることは、「生活者科学選修はよりよき生活を送れる人材の養成機関である」という曲解です。確かに自分や将来の家庭生活におけるある程度の生活力は付くかもしれませんが、これはあくまで結果です。「犯罪学を学ぶためには犯罪者でなければならい」というロジックが誤りであるように、生活を学ぶからといって、生活のプロである必要はありません。

## ３．生活者科学講座の専門教育カリキュラム

以下に生活者科学講座の専門教育カリキュラムについて簡単に説明します。その理解には「概念的な把握」と「分野の理解」、「個別の科目の内容理解」および、「単位数」について知っておく必要があります。

### 3.1　カリキュラムの構造概念

専門教育カリキュラムは（1）課程共通科目と、（2）選修専門科目、の二種類があり、（1）の科目はすべて必修です。具体的には、地域科学情報処理、企業・行政研修と卒業研究の計３科目が必修です。

（2）の選修専門科目は専門学習の基礎となる「基盤科目」群とそれの延長線上にある「基幹科目」群、および両科目内容を体験的に身に着けるための「実践指導科目」群に分かれ、最後に卒業研究があります。それらの科目の殆どは選修所属の教員が担当していますが、非常勤講師にお願いしている科目と、「学校教育課程・教科教育選修・家政教育講座」の二名の教員による科目、およびその他の教員による科目の幾つかが入っています。

また、地域科学課程の外の二選修の科目を利用した生活者研究を補う「補強科目」群と他課程で開講されている内容が関連する科目を利用した「関連科目」群があります。さらに、カリキュラム上は「自由選択科目」群として任意に選択できる科目、および卒業単位には繰り込めないタイプの「教職関連科目」群があります。（注：卒業単位に繰り込めるタイプの教職関連科目もあるので注意）この分類による科目一覧を下に示します。また、表の科目の他に、課程共通必修の３科目と卒業研究がある。）

下の表では、科目群の右に必修・選択必修の単位数を記載しています。また、補強課目＋関連科目群の合計単位として８単位が選択必修です。

| 基盤科目（16） | 基幹科目（26） | 実践指導科目（10） | 補強科目・関連科目（8） | |
|---|---|---|---|---|
| 生活者研究ゼミⅠ | 消費者行動論 | 消費生活実験・実習Ⅰ | （補強科目） | 民法Ⅱ |
| 生活者研究ゼミⅡ | 消費生活調査論 | 消費生活実験・実習Ⅱ | 地域社会論 | 行政法Ⅱ |
| 生活者研究ゼミⅢ | 食生活環境論 | 食生活実験・実習Ⅰ | 地域社会論演習Ⅰ | 文化地理学 |
| 消費者問題論 | 食生活資源論 | 食生活実験・実習Ⅱ | 庶民生活史論 | 農業・農村地理学 |
| 食生活機能論 | 食品健康論 | 健康生活実験・実習Ⅰ | 情報活用技術論 | 都市地理学 |
| 衣生活資源論 | 生活産業論 | 健康生活実験・実習Ⅱ | 社会統計学 | 観光・交通地理学 |
| 住生活機構論 | 衣生活機構論 | 衣生活実験・実習Ⅰ | 地域文化史論Ⅰ | 自然地理学特論 |
| 健康栄養論 | 衣生活環境論 | 衣生活実験・実習Ⅱ | 地域文化史論Ⅱ | 地域分析法 |
| | 住生活環境論 | 住生活実験・実習Ⅰ | 地域文化史論Ⅲ | 家庭機械・電気 |
| | 住生活資源論 | 住生活実験・実習Ⅱ | 福祉社会論 | 被服製作実習 |
| | 社会調査論Ⅰ | 地域生活特論 | 文化環境論 | 家庭科授業づくり演習 |
| | 生活経営論Ⅰ | 地域生活実習 | 現代社会論 | |
| | ジェンダー論 | | 地域文化史概論 | （関連科目） |
| | 家族関係論 | | 地域社会史論Ⅰ | 環境アセスメント論 |
| | 家族臨床論 | | 地域社会史論Ⅱ | 環境倫理学 |
| | 子ども生活論Ⅰ | | 地域社会史論Ⅲ | 情報法論 |
| | 子ども生活論Ⅱ | | 地域生活史論Ⅰ | 公的部門の経済学 |
| | ミクロの経済学 | | 地域生活史論Ⅱ | 情報産業論 |
| | マクロの経済学 | | 地域生活史論Ⅲ | 教育政策論演習 |
| | | | 地方自治法 | 教育文化行政論 |

## 3.2　各授業科目が目的とするもの

各科目の内容はシラバスに譲りますが、履修計画を立てる上において各科目の位置づけ・関連を知っておくことは重要です。先の生活の構造の図１を参考に、以下に抜粋していくつかの科目を例示します。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 生活理解 | 生活者研究ゼミⅠ～Ⅲ | 生活経営論Ⅰ | 地域生活特論 | 地域生活実習 |
| 生活主体（生活の経営） | 生活経営論Ⅰ | | | |
| 生活主体（人間関係） | ジェンダー論 | 家族関係論 | 家族臨床論 | 子ども生活論Ⅰ、Ⅱ |
| 生活主体（人の健康） | 健康栄養論 | 食品健康論 | 生活産業論 | 健康生活実験・実習 |
| 生活媒体（消費者） | 消費者問題論 | 消費者行動論 | 消費生活調査論 | 消費生活実験・実習 |
| 生活客体（食物） | 食生活機構論 | 食生活資源論 | 食生活環境論 | 食生活実験・実習 |
| 生活客体（衣服） | 衣生活機構論 | 衣生活資源論 | 衣生活環境論 | 衣生活実験・実習 |
| 生活客体（住居） | 住生活機構論 | 住生活資源論 | 住生活環境論 | 住生活実験・実習 |

上表にて、

（1）生活理解に関する科目

先の図における生活者理解そのものに関する科目です。

（2）生活主体に関する科目

先の図における「人」は生活の主体をなすいわばマネージャーです。生活者科学を理解するためには、生活主体者として人間関係および健康に生きることについて理解する必要があります。

（3）生活主体者と生活媒体の関係に関する科目

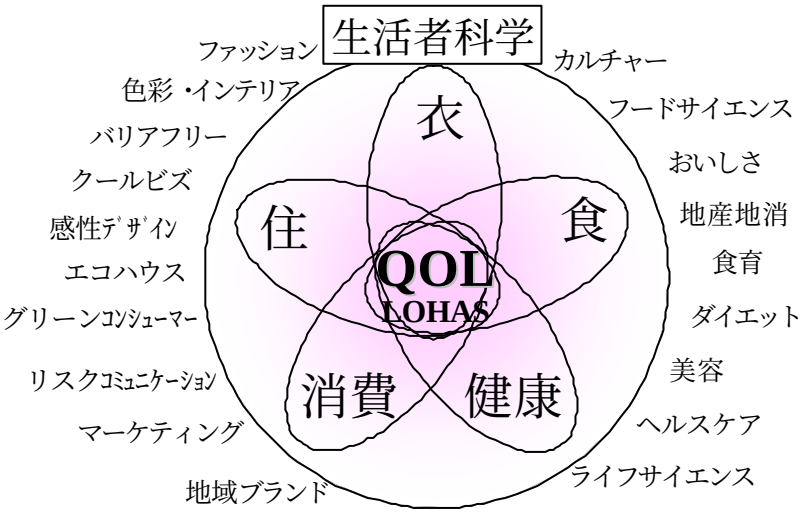
先の図における「人と物」の関係、即ち消費生活研究関連の科目がこれにあたります。

（4）生活客体に関する科目

先の図における「物」の視点に立って、対人、対社会・環境を考えるため、生活客体としての「衣・食・住」と人の生活を考える科目です。

生活者科学の対象とする範囲は下図の大きな円であり、その中に楕円で表された 5 つの分野がありますが、それぞれの分野は相互に重なりあっています。中央に示した共通の目的を重視し、手法には固執しません。高校の科目のイメージからは離れますが、文理融合型で社会科学から自然科学まで必要な手法を総動員します。そして選修共通目的の生活の質（Quality of Life, QOL）の向上と持続可能な社会との両立を目指して学んでいきます。

図２の LOHAS（ロハス）とは、米国の社会学者ポール・レイと心理学者シェリー・アンダーソンが提唱した Lifestyles of Health and Sustainability の頭文字をつないだ造語です。簡単にいうと、「自分自身（及び家族など）の健康と地球環境を意識したライフスタイル」のことで、生活者科学の目指すものと一致します。



# 消 費 生 活 分 野 の 紹 介

生活者科学選修

## 1.　消費生活の変容と消費者問題の多発

長い歴史の中で、私たちの消費生活は大きな変化を遂げてきました。戦後、モノが絶対的に不足する中で生存に必要な物資獲得のための消費が行われた時代から、「消費は美徳」といわれた高度経済成長期の大量生産・大量消費の時代を経て、様々なモノやサービスが人々に広く行き渡り、モノが余る時代へ。「皆が持っているモノは欲しい」、「皆が持っていないモノが欲しい」、「気に入ったモノしか買わない」という消費者を相手に、売り手も消費者ニーズを満たすべく、一品種大量生産から多品種少量生産へと生産システムの転換を迫られ、＜作ったモノを売る＞というかつての生産者起点の考え方から、＜消費者が欲しがるようなモノを作って売る＞という消費者起点の考え方へと発想転換を迫られました。かつてのようにはモノが売れない中、企業は頻繁にモデルチェンジを繰り返し、次々と新製品を投入するなど「計画的陳腐化戦略」と呼ばれるマーケティング手法を用いて、消費者の購買欲求・買替え（買増し）需要を喚起してきました。

私たちの暮らしは、飛躍的に快適で便利なものになりましたが、大量に消費された「モノ」は大量の「ゴミ」として廃棄され、深刻なゴミ問題や産業廃棄物の問題を引き起こしてきました。また、架空請求や悪質リフォーム、食品偽装など、私たち消費者の暮らしを脅かし、売り手に対する信頼を根底から揺るがす問題が激増しています。

皆さんは、多くのものに囲まれる生活の中で、自らの消費者としての行動を考えたことがありますか。消費者行動論では、購買時の意思決定のメカニズムやライフスタイル・世代ごとの消費スタイルを探ると同時に、そうした消費者の行動と企業のマーケティング戦略の関係について学びます。企業にとって、顧客の購買行動データは、ヒット商品の開発やマーケティングを展開する上での重要な情報源となっています。長引く不況の中にあっても、賑わいを見せている高級店、ＣＭを見て、新製品と聞くと欲しくなる消費者心理、なぜかいつも同じ店で買ってしまい、多くの製品から特定ブランドを選びとる消費行動を取り上げます。消費生活領域では、消費者行動や企業活動、私たちが直面する消費をめぐる諸問題を取り上げ、消費者・企業・行政といった複合的な視点から考えます。

## 2．消費生活関連科目

消費に関わる様々な問題を考えていくために、生活者科学講座では下記のような科目を開講しています。

① **マーケティング論（マーケティングと現代社会）**：生産者・企業の対市場活動（＝マーケティング活動）に軸足を置き、＜消費者行動・消費生活＞を捉えます。

② **消費者行動論**：消費者・生活者の行動や心理に軸足を置き、＜消費生活＞を捉えます。

③ **消費者問題論**：生産から消費、廃棄にいたるまでの過程で生じる諸問題について考えます。

④ **消費生活調査論**：①－③を対象に、消費生活全般、すなわち企業のマーケティング活動や消費者行動に関する調査を行います。どのような調査方法があるのか、どのように対象にアプローチするのかといった点について実践的に学びます。

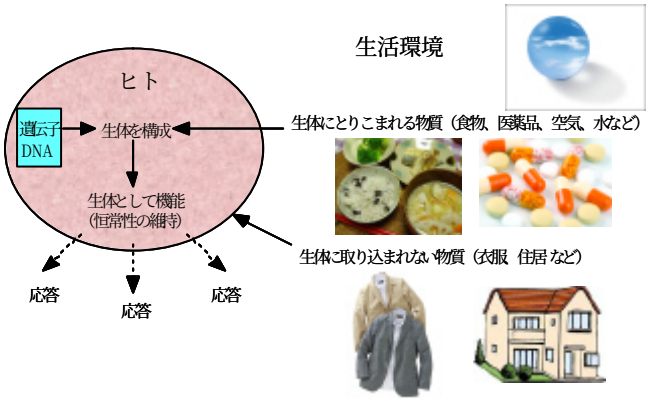
⑤ **消費生活実験・実習Ⅰ/Ⅱ**：消費に関わるテーマを設定し、文献講読を行い、議論を重ねます。

# 健 康 生 活 分 野 の 紹 介

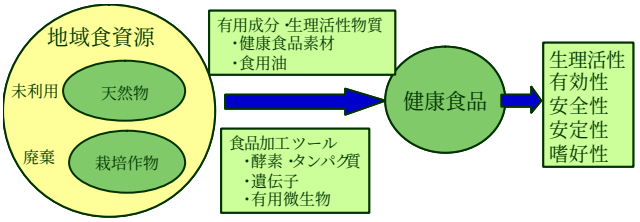
池本　敦　（栄養生化学、食環境学）

## 1. はじめに

地域には少子高齢化や経済停滞などの様々な問題がありますが、生活者視点で見ると、健康や食の安全・安心が重要な関心事となっています。秋田の健康課題は多く、ガン・脳血管疾患の生活習慣病の死亡率は全国上位で、平均寿命は下位です。このような状況で、健康増進の観点から栄養学的に見てどのような食環境が適切なのかについて、教育・研究を行っています。




また、秋田県は食資源が豊富で、これらを活用した健康食品の開発研究を行っています。地域活性化の観点から、健康食品の地域ブランド化や特産品化を含めた産学官連携や地域支援活動も行っています。




## 2. 主な担当講義

① 健康栄養論　：栄養学の理論と実践

1. 健康な食生活を営むための栄養学の体系を理解する（食品→成分・栄養素→生体）
2. 栄養生化学の基礎を身につけ、主要な栄養素の機能を説明できる（炭水化物（糖質）、脂質、タンパク質、ビタミン、ミネラル）
3. 健康と栄養に関する諸問題を客観的に説明できる（アミノ酸食品の効果は？、コレステロールは健康に有害？、脂質の過剰摂取の問題点）

② 食品健康論　：食と健康に関わる諸問題

1. 食・健康に関する社会制度や法体系（薬事法、食品衛生法、健康増進法）
2. 健康食品の諸制度と科学的評価（特定保健用食品、サプリメント、ダイエット食品、健康食品の科学的評価）
3. 食・健康に関する地域課題（生活習慣病の現状、肥満とメタボリック症候群）

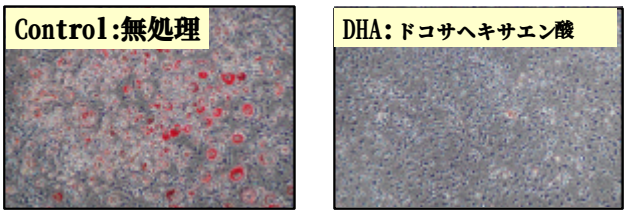
③ 生活産業論　：生活資源の産業化と企業活動

1. 生活資源の有効利用と知的財産（特許、発明やアイデアの産業化、知的財産・特許）
2. 生活資源の産業化・事業化（アイデア・資源の活用シナリオ、産業化のスキーム、事業モデル分析）
3. 生活資源の産業化と地域社会（地域生活や経済への影響、事業や企業価値の評価と地域波及効果）

## 3. 主な研究内容

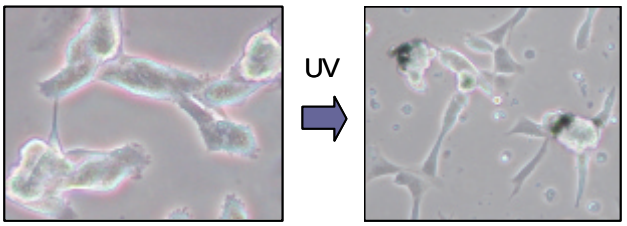
① DHA は頭に良いだけではなく肥満にも有効

魚油の成分であるDHA は、脂肪細胞の分化を抑制した（赤が脂肪細胞に蓄積した脂肪滴）。



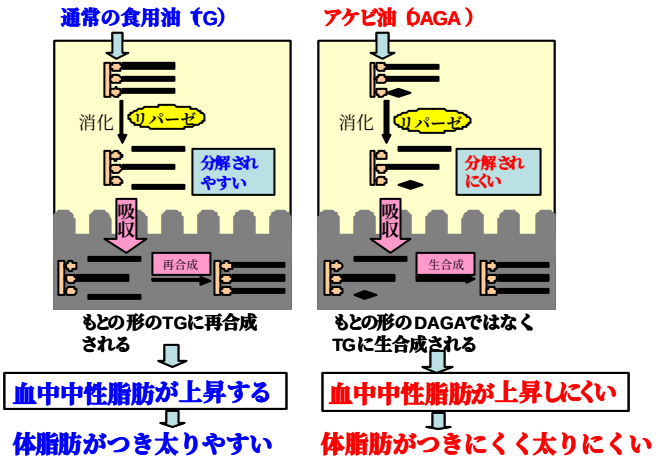

② 美白に有効な地域食材を発見

皮膚細胞のメラニン産生を抑制する山菜類を見つけ、美容によい健康食品・サプリメントや化粧品を開発。




③ 太りにくい秋田の伝統的食用油

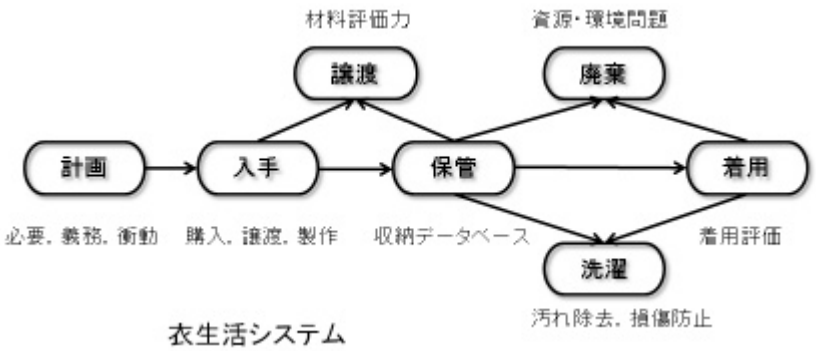
かつて秋田ではアケビの種子から油を搾り利用していたが、その主成分は通常の食用油とは異なり、食べても体脂肪が付きにくく太りにくいことを発見。



# 衣　生　活　分　野　の　紹　介

石黒　純一　（被服科学）

【はじめに】衣生活全体について作業工程（部品）の接合によるシステムとして捉えた下図を使って説明しよう。現代の衣生活科学はアパレル利用システム学といってよい。同時に，この部品接合においては情報がキーワードになる。




衣生活システム

【計画】衣生活システムの入り口，即ち，なぜ衣服を着るのかを，必要・義務・衝動の 3 点から考えたい。必要性は着用動機の観点から，義務は着用者の個性表現との相克の中で，衝動は潜在的な購入願望の表出と捉えられ，いずれもファッション情報をキーに説明できよう。「衣生活機構論」における主たるテーマである。

【入手】計画の成就が入手であり，実体としての衣服を手に入れる楽しい作業である。かつて衣料の入手は製作によっていたが，現在は購入や譲渡によることが多い。だれもが一度は失敗するのがこの入手である。アパレル情報の利用における情報強者・弱者の分かれ目は何だろう。「衣生活機構論」と「衣生活資源論」でこの問題を取り扱う。

【保管】出番を控えた衣服の収納状態を指すが，それは生活の主体者たる個人の力量発揮の場でもある。諸君の今朝の衣服の着用は，まさに，自分の衣類データベース（購入情報，アイテム情報，着用結果情報等），今日の天気・予定を瞬時に情報処理し，着用すべき衣料を仮想世界としてのデータベース・現実世界としての収納家具から取り出したものである。一方では，着用されることなくタンスの肥やしとなった衣類はやがて廃棄や情報へと流れる運命をたどる。「衣生活機構論」「衣生活資源論」「衣生活環境論」で取り扱うが，最も熱が入る部分である。

【着用】衣生活における，特に初めて着る衣服にとっての晴れ舞台であるが，厳しい現実である評価が待っている。この評価は着用者と他人によってなされ，前者は着心地の評価を，後者は社会的評価とみた目の評価を行う。結果的に，そこでは美的・心理的快適性にもとづく総合評価が下される。どうせ評価される・するなら高い評価を得たい。「衣生活機構論」のメインテーマである。

【洗濯】洗濯は洗濯機と洗剤の発展・転換に関連した 21 世紀の技術課題である。ファッション産業という流行の発信勢力と対峙しながら，衣服のメンテナンスによる着用回数・期間を増やし，他の服の購入量を減らすことを目的とする。かつて洗濯は女性にとっての重労働であったが，現在は洗剤や洗濯条件設定の選択がポイントになった典型的な生活技術である。「着たら汚れる←→洗ったら傷む」現実をどう乗り切るかが課題である。「衣生活環境論」「衣生活資源論」で取り扱う。

【廃棄】昨今はやりのエコ問題において，格好の素材が衣料廃棄物である。即ち，未だ着ることができるのに捨てることへ合理的な説明をする課題である。衣類の再利用（リユースやリサイイクル）がなぜ困難なのかを「衣生活環境論」で考えたい。ファッションはリデュースを妨げていることにも留意したい。

【譲渡】譲渡は各自の衣生活システムと他人の衣生活システムの乗り換えの問題である。フリマ・リサイクルショップを通した古衣料の流通は完全に市民権を得ており，買い手における材料評価力（目利き）が課題となっている。よりよいものを入手するためのスキルとして「衣生活実験・実習」を通して体験的に考えたい。

# 食 生 活 分 野 の 紹 介

長沼　誠子　（調理科学）

おいしく食べて健康に・・・・をテーマに、食生活機能論、食生活資源論、食生活環境論、食生活実験実習等の授業を担当しています。食生活＊＊論は、生活者（人）と食べ物と地域（環境）とのかかわりすなわち食生活の課題について考える授業科目です。

生活者の視点から、地域における食生活の課題を見出し、評価し、その方策を考え、提案する分野です。

それでは、食生活の課題には、どのようなことがあるでしょうか。

「大学生になって一人暮らしをはじめたら、食事が不規則になり、栄養バランスが取れない。解決策は？」というような私的・個人的な問題もあるでしょうが、地域の実情にも（秋田県を例として）目をむけてみましょう。「秋田県は高齢化がすすんでいる。高齢者は日頃、買い物や食事の準備等、食生活において問題をかかえていないか？」、「秋田県は長い間、脳血管疾患の罹患率が高いといわれ、その原因の一つに塩分摂取量があげられてきた。秋田県人は塩辛いものが好きと思われているが、ほんとうにそうだろうか？」「秋田は農業県で食料自給率は極めて高い。しかし一方、農産物の加工をはじめ食品加工業は低迷している。地域の食資源をもっと活用できないか？」、「秋田県には、米・野菜・山菜・魚など地域の食材を活用した郷土食がある。食の国際化や簡便化が進行する中で、それらは継承されているのか、地域の食文化は失われていくのか？」等、様々な課題がうかんできます。

授業や研究をとおして、これらの課題について、実態を科学的に捉え、評価します。そして、どのようにしたら問題点を解決することができるのかを、考えていきます。

主な授業の内容を紹介しましょう。

食生活機能論：食べる人の意識や行動を、主として感覚機能（嗜好機能）から考えます。おいしさ評価・食嗜好形成のメカニズム、嗜好機能と栄養機能との関係性を学びます。

食生活資源論：地域食材の活用の観点から、食材の機能について学び、食品・製品開発や食卓提案にかかわるアイディアを探ります。

食生活環境論：食べる人の食習慣が成立した背景、地域の食文化について学び、その継承について考えます。

食生活実験実習Ⅰ：フードコーディネィター、フードスペシャリストをめざして、メニュー分析・評価、メニュー作成・提案、郷土食の再現・分析・評価・改善等を、実験実習します。

食生活実験実習Ⅱ：おいしさの評価法として官能評価法について学びます。官能評価士をめざします。地域食材を中心とした食品・製品の提案にむけて、実験実習します。

皆さん、生活者にとって魅力的で、環境や地域にもやさしい、食品や食事を提案してみませんか！

最後にトピックス：ゼミ活動として、「大学いぶりがっこ」の提案を目指し、横手山内地区をフィールドとして、いぶりがっこの生産・製造作業や地域の皆さんとの交流に、取り組んでいます。（秋田大学ＨＰ：http://www.akita-u.ac.jp/honbu/general/b_iburigakko.html）

# 住 生 活 分 野 の 紹 介

西川　竜二　（建築環境学）

人にやさしい居住環境を地球にやさしい方法で実現する・・・をテーマに教育・研究を行っています。

○　若者も・子育て世代も・高齢でも、健康・快適に暮らせる住まい・まち（住環境・都市環境）

○　地域の気候風土に適応して（自然エネルギー利用で）、地産地消（地場産材などの利用）の資源循環型の環境共生的な建築

○　地域に愛着や誇りのもてる伝統的・文化的な建築様式や街並み景観

これらは、地域活性化のための生活・社会基盤や観光資源として重要なものです。

現在の日本社会は、少子高齢化、人口減少、地球温暖化、低成長経済などの様々な課題に直面していますが、課題が多いということは皆さんが改善・解決していくべき取り組みがいのあるテーマが多くあるということです。例えば、前述の課題に対して、大学等の研究機関や社会では次のような取り組みがあります。「子育て世帯や高齢者を重視した住宅やまちづくり」、「減築リフォーム（増築の逆の発想！：子育てが終わった世帯が使わなくなった余分な部屋を壊して家を小さく改修して居住性や省エネ・経済性を向上させる）」、「コンパクトシティー」、「街なか居住」、「世代間の住み替え（子育てが終わった高齢世帯の優良住宅をこれから子育てする世帯にゆずる（売却・賃貸））、「省エネ住宅の新設や省エネリフォーム」、「環境教育」、「景観まちづくりによる町興し」、等々。

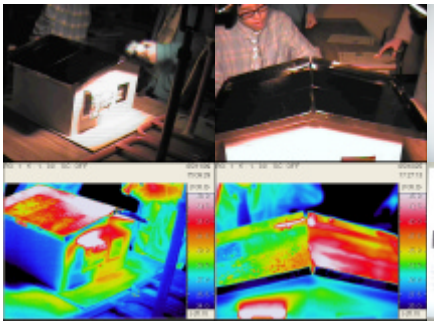
また、秋田大学のある秋田の課題に目をむければ、「脳血管死亡率の高さと住環境の問題（冬に家のなかで暖房室と非暖房室の室温差が大きく血圧の上昇を招く⇒温度の段差、温度のバリアフリー問題）」、「冬季日照不足が気分や体内時計に与える影響はどうか？」、「家庭の光熱水費が全国上位、すなわち家庭からの $CO_2$ 排出量も多い（平成 19 年度家計調査年報で、秋田市は県庁所在地のなかで 1 位）」、「中心市街地の衰退、空き家の増加」、「地域の景観資源の調査・保全や修景・観光への利活用」、など多様な取り組みテーマがあります。

学生は、授業や卒業研究をとおして、これらの課題について、教室での講義で学ぶだけでなく、各種の調査方法（文献・アンケート・インタビュー・観察・実験・被験者実験・実測）を実習で修得し、学生自身が調査・評価し、その調査結果にもとづいた具体的な改善・解決方法を考えます。主な授業科目を紹介します。

「**住生活環境論**」では、お年寄りから子どもまで、人に健康・快適な居住環境の条件、そうした環境を自然エネルギーを活かして形成する住まいのつくり方・住まい方、生活の環境衛生・省エネ・環境負荷削減に関する法制度や政策・企業活動を学びます。

「**住生活機構論**」では、住まいや都市計画の法制度とその意味、社会家族と住宅間取りの歴史的変遷、住宅政策などを学びます。

「**住生活資源論**」では、フィールドに出かけて、地域の住生活資源を見聞し、調査・記録や評価の方法を実地で学びます。



【環境共生住宅の熱環境実験】

【家族のﾗｲﾌｽﾀｲﾙと間取りの提案】

【景観調査実習】

おわりに、私自身は建築学科の出身で大学では主に建物づくりのことだけを勉強しました。それと比較して、生活者科学選修のカリキュラムでは、「衣・食・住・健康・消費者」の各分野の学びを学習者が自分のなかで統合させ、地域生活を多面的かつ総合的にとらえる知識と手法とが身に付けられます。これは生活者科学選修で学ぶことの強みです。こうした能力は、公的・民間を問わず生活サービスの分野で活用できます。

# 地域科学課程 生活者科学選修　卒業研究題目一覧

過去 3 年間平成 18 年～平成 20 年度）

- 変化する書籍流通と消費者行動
- アポトーシスを誘導し抗ガン活性を有する地域天然資源に関する研究
- メラニン色素産生酵素であるチロシナーゼを阻害する機能性素材に関する研究
- 公共ホールのマーケティングと利用者ニーズ～秋田市内の3つのホールを事例として～
- 居住者の概日リズムに配慮した住宅の昼光照明デザイン
- 食事環境が食事満足度に与える影響
- 秋田市における中心市街地活性化案
- 購買時にイメージ広告が消費者に与える影響について～ペットボトル緑茶飲料を例として～
- シティズンシップ教育と行動的市民性の育成
- 郷土食を中心とした高齢者の食嗜好に関する研究
- 住宅 LDK の照明・暖房環境が家具配置と家族団らんに与える影響
- 日没前後の光環境変化の下で好まれる照度の下限値に関する実験研究
- 米粉を利用したゲル状食品のテクスチャーに関する研究
- 温泉地の多様な集客 PR とその類型化～秋田県内の主要温泉地のよりよい広報を目指して～
- 感覚器官がおいしさ評価に与える影響
- 学校教育における脂質栄養と食事バランスガイドの改善に関する研究
- 秋田大学手形キャンパスの色彩景観ガイドラインの提案
- 多価不飽和脂肪酸による骨芽細胞の分化制御に関する研究
- 搗精粉を利用した加工食品の特性と嗜好性に関する研究
- 菓子類の摂食行動に関する研究
- 秋田県の図書館の現状と課題－住民のための図書館を目指して－
- 秋田市中心市街地の再構築? 若者と高齢者の両消費者の視点から?
- メイク技術における錯視効果の解析
- 健康食品素材としてのアケビ果皮の抗肥満作用に関する研究
- 秋田県の観光施策と観光客のニーズとの適合性に関する一考察
- 環境保全活動の現状と課題－秋田県における子どもへの環境教育を中心として－
- 製パンにおける油の利用に関する研究－使用油の質向上の観点から－
- 秋田県における土産物の分析評価に関する研究－菓子類を対象として－
- 多価不飽和脂肪酸による筋細胞の機能制御を介したメタボリック症候群予防に関する研究
- 日本たばこ産業株式会社(JT)の CSR 活動と消費者意識
- 抗アレルギー作用を有する新規食資源の探索に関する研究
- 皮膚細胞のメラニン色素産生を抑制する食品成分に関する研究
- アケビ果皮をはじめとする地域食資源を活用した健康食品の開発に関する研究
- 食品関連企業における CSR 活動と消費者意識
- ヒト白血病細胞株に対して抗ガン活性を有する食品成分に関する研究
- 学校給食を活用した食育についての研究－その評価方法に着目して－
- おから利用菓子類の調理特性及び嗜好性に関する研究
- 皮膚機能に及ぼす多価不飽和脂肪酸の影響に関する研究
- 中学生女子の友人関係の特徴－同性の友人との会話に注目して－
- 日本の自動車メーカーの環境マーケティングと消費者意識
- 若年層におけるしょっつるの嗜好性および利用の多様化に関する研究
- 高齢社会の到来と高齢者世帯の消費をめぐる動向調査－秋田県を中心とした比較分析－
- 積雪寒冷地において夏季と冬季に好まれる照度・色温度と窓の有無の室内条件に関する研究
- 健康増進に有効な新規アセチル基含有食用油の開発に関する研究
- ファミリー消費における子どもの影響力～少子高齢化時代における子どもの消費動向の展望～
- 食行動・食意識の調査からみる高齢者の食生活課題
- 青少年スポーツの現状とスポーツ関連企業のマーケティング～青少年の運動能力の向上にマーケティング理論はどのように貢献できるか～
- 柔軟仕上げ剤処理布の風合いおよび香りの持続性に対する乾燥温度の影響について
- 秋田県の果実特産品の嗜好性および新規テクスチャー製品への利用
- 米食の地域性に関する研究
- 食品成分による脂肪細胞の分化の調節に関する研究
- 冷蔵庫の電力消費と省エネ行動の実測
- アケビ果皮を有効利用するための機能性の解析に関する研究
- 小中学生女子の消費者行動に関する調査～衣料購入にみる「子どもの消費者社会化」
- 画像解析によるメイク技術の分析
- 消費者・行政・企業間におけるリスクコミュニケーションの現状と課題～企業不祥事と消費者の意識・行動の変化～
- 靴下のフィット性要因に関する研究
- 口紅と肌色の色彩調和－パーソナルカラー測定方法の応用－
- ファッションのクラスター化と自己イメージの関連付け
- 健康食品・サプリメントとしてのオメガ 3 脂肪酸の実態と利用法に関する研究